

自分が自分でなくなってしまう・・・

私は高校を卒業後、地元を離れ都市部のホテルに就職しました。私は、初めての都会の一人暮らしで、誰一人知り合いがなく、寂しく過ごしていました。そんな時、私はホテルの常連客の男性と仲良くなりました。その男性は見た目は怖かったのですが、私にはとても優しく、私とその男性はすぐに男女の仲になったのです。

ある日、彼から

いいものがあるから

と勧められ、水に溶かした白い粉を注射されたのです。私はこれが噂に聞く覚せい剤かと思って怖かったのですが、その時は彼に嫌われたくないという気持ちが強く、彼の言うとおりに腕を出し注射してもらったのです。そうしたところ、背中がゾクツとし、足が宙に浮くような軽快な気分になりました。

それ以降、私は覚せい剤の魅力に完全にはまってしまい、しだいに1回に使う量が増え、そのうちに1日に何度も覚せい剤を使うようになってしまったのです。当然、仕事には行かなくなってしまいました。

そんな日々を過ごしているうちに、私は段々幻覚を見るようになってきました。その幻覚の内容は、

有りもしない仏壇が見える

誰もいるはずの無い部屋なのに、知らない男の人が私に「いつ死ぬんだ」

と話しかけてくる

といったものです。

現実にはあり得ないのは分かるのですが、私には、はっきりそれが見えるのです。こんな恐怖は、実際に体験した人でないと分からないと思います。幻覚を見るようになって、私は覚せい剤をやめられず、覚せい剤の為なら何でもするようになっていました。

覚せい剤がないと、体がだるくて何もできないのです。生活が覚せい剤を中心に動いてい

ました。もう自分の意志だけではどうしようもなくなっていました。覚せい剤をやめればいいのはわかっています。何度もやめようとしてきました。でも、結局やめられないのです。

こんな状況が続いたある日、私は麻薬取締官に逮捕されました。

逮捕された時は、自分がどうなるのか分からなくて怖かったのですが、この生活から抜け出せると思うと、ちょっとだけほっとしたのを覚えています。逮捕されてから、当時の自分を振り返ってみると、自分の行動がどんなにおかしかったか気づきます。

例えば、いつも誰かに狙われているような気がして、護身用に果物ナイフを持ち歩いていたのです。こんなこと、普通に暮らしていれば絶対にしません。でも、覚せい剤を使っていると、異常を異常と感じなくなります。当時は、自分が狙われていることや、自分が果物ナイフを持ち歩くことに何の疑問も持っていませんでした。

もし、あの時捕まっていなかったら、私は今頃何をしていたかわかりません。覚せい剤の恐ろしいことは、逮捕されることでなく、自分が自分でなくなってしまうことなのです。

覚せい剤をやめた今でも、まだ覚せい剤の夢を見たりして、使いたくなるときがあります。

こんな時は、今日だけは使うのを我慢しようとして自分に言い聞かせて、やっと思わないでいられるという生活を送っているのです。

私は覚せい剤のせいで人生が狂ってしまいました。あの時の最初の覚せい剤を使わなかったらと思うと悔やんでも悔やみきれません。

(20代 女性)